水島メモリーズ

朝鮮学校編

私たちの学校ウリハッキョ

階段の踊り場にある掲示板「言葉はすなわち民族である」

朝鮮学校が育むアイデンティティ

岡山朝鮮初中級学校は水島にあります。岡山県唯一の朝鮮学校です。生徒数は幼稚園の園児を加えて約80名で、岡山県内から学校バスを使って通っています。なぜ水島に朝鮮学校があるのかというと、水島が岡山県内で一番在日コリアンが多かったからです。ただし岡山には、朝鮮学校の高級部（高校）はなく、進学するには広島や兵庫・大阪等に出なければなりません。大学は、東京に朝鮮大学校があります。

校内で使う言葉は朝鮮語です。教科書はもちろんハングルで書かれています。校内の掲示もハングルです。「家庭で使う言葉は日本語なんです。この朝鮮学校に通って、朝鮮語を習得していくんですよ」と秋剛鎬（チュガンホ）校長先生。「トリリンガルをめざしているんです」といいます。朝鮮語・日本語・英語の3か国語です。

学校のスローガンは「一人はみんなのために、みん

目次

朝鮮学校が育むアイデンティティ p3

水島と朝鮮人労働者 p6

多文化共生をめざす水島 p10

地域カフェとみずしま財団について p14

民族舞踊に使用する帽子・サンモ ▶

校門横の花壇

一学年１クラスの小規模校です

なは一人のために」。一学年の生徒数は多くないですが、少人数の中で教え合い、支え合いながら学習が展開されています。学校の雰囲気は家庭的で、とても温かな空気で包まれています。「この日除けはアボジ（お父さん）の会がつくってくれました。月に１回はオモニ（お母さん）の会が昼ごはんをつくってくれます」（秋先生）。父母も学校のために力を合わせて学校運営がなされています。

クラブ活動は、男子はサッカー、女子は伝統舞踊が活発です。サッカーでは、卒業生の中にＪリーガーになった梁圭史（リャンキュサ）や李漢宰（リハンジェ）がいます。二人とも朝鮮民主主義人民共和国の代表となりました。伝統舞踊は「朝鮮半島の学校より朝鮮学校の方が活発で、よく継承しているんですよ」とのこと。「伝統舞踊だけをやっているわけではなくて、Ｋ－ＰＯＰが好きな子も多いんです」と微笑みながら秋先生は教えてくれました。

朝鮮学校は、日本の中で朝鮮半島をルーツにしている人たちが、生きるためのアイデンティティを模索し、育む場なのです。

秋剛鎬校長先生

アボジの会が取り付けてくれた日除け

水島と朝鮮人労働者

水島は、1943（昭和18）年に操業を開始した三菱重工業水島航空機製作所のためにつくられたまちです。東高梁川の廃川地に社宅がつくられ、埋め立て地に工場が建設されました。この工場造成のために、日本が植民地として支配していた朝鮮半島から労働者が集められたのです（倉敷市史研究会編『新修倉敷市史第六巻 近代（下）』倉敷市、2004年、862頁）。

「軍都水島」ともいわれるように、三菱重工業水島航空機製作所では海軍のために爆撃機や戦闘機が製造されていましたが、戦争末期には、空襲に備えて工場の疎開先として亀島山に地下工場がつくられることになりました。また王島山の麓には、1944（昭和19）年11月1日に倉敷海軍航空隊が開隊されて、予科練教育が行われました。この予科練養成所や亀島山地下工場の土木建設工事を担ったのも、朝鮮人労働者でした（崔洛基『愛国愛族の魂で闘った倉敷同胞の歩み（復刻版）』在日本朝鮮人総聯合会岡山県倉敷支部、2021年、25頁。亀島山地下工場を語りつぐ会編『ガイドブック亀島山地下工場』亀島山地下工場を語りつぐ会、2013年）。

こうした背景から、水島が岡山県内で在日コリアンのもっとも多い地域となったのです。岡山県内にいた朝鮮の人たちの数は、1930（昭和5）年には3200人あまりでしたが、1945（昭和20）年の終戦時には、その10倍以上の3万5000人あまりに増加しており、そのうち水島地区に1万人以上が暮らしていました。居住環境は劣悪であり、厚紙にコールタールを塗った屋根で雨風をしのぐようなバラックが多かったそうです（前掲『愛国愛族の魂で闘った倉敷同胞の歩み』12～13、26～31頁）。

日本の敗戦は、朝鮮の人たちにとっては解放にほかなりませんでした。そして朝鮮半島への帰還がはじまりましたが、日本（内地）で生まれ育ち、朝鮮語を知らない子どもたちがいたため、帰国の準備として言葉を教える取り組みが始まりました。これが現在の朝鮮学校のルーツです。倉敷でも、旧倉敷地区、水島、児島に朝鮮（人）学校がつくられました。しかし、こうした動きを日本政府と占領軍は危険視し、1948（昭和23）～1949（昭和24）年に2回にわたり、朝鮮人学校閉鎖令が出されます。1950（昭和25）年2～3月、旧倉敷と水島の朝鮮人学校も強制的に閉鎖されてしまいました（水野直樹・文京洙『在日朝鮮人――歴史と現在』岩波新書、2015年、111～113頁。前掲『愛国愛族の魂で闘った倉敷

1970（昭和45）年に校舎が新築され、
校庭に庭木を植えているところ（髙田昭雄氏撮影）

同胞の歩み』34、41頁）。

こうした困難を乗り越えて、1956（昭和31）年に岡山市で初中級学校が、1957（昭和32）年に水島で初級学校が再スタートします（2000（平成12）年に統合して現在に至る）。そのような時期に、朝鮮学校を資金的に支援したのが朝鮮民主主義人民共和国（以下、共和国）でした。1957（昭和32）年に始まる教育援助費はその後も継続し、各地で朝鮮学校を建設していく力となりました。このような背景から共和国の影響力が強かったのですが、朝鮮学校には韓国籍の生徒が多く、日本国籍の生徒もいます。

公的な支援が限られている中で、朝鮮学校の財政は厳しいのが現状です。秋先生によれば、結婚して子どもが生まれたりすると、経済的な理由から教師の仕事を続けられなく場合もあるといいます。

2000年代に入り、韓国と共和国の南北首脳会談がスタートしたころから、南北統一への期待が広がり、それによって学校の様子も大きく変わってきたそうです。在日コリアンは韓国とも共和国ともつながっているので、南北統一のかけはしになれるのではないか、と秋先生はいいます。

1970（昭和45）年ごろの朝鮮学校正門（髙田昭雄氏撮影）

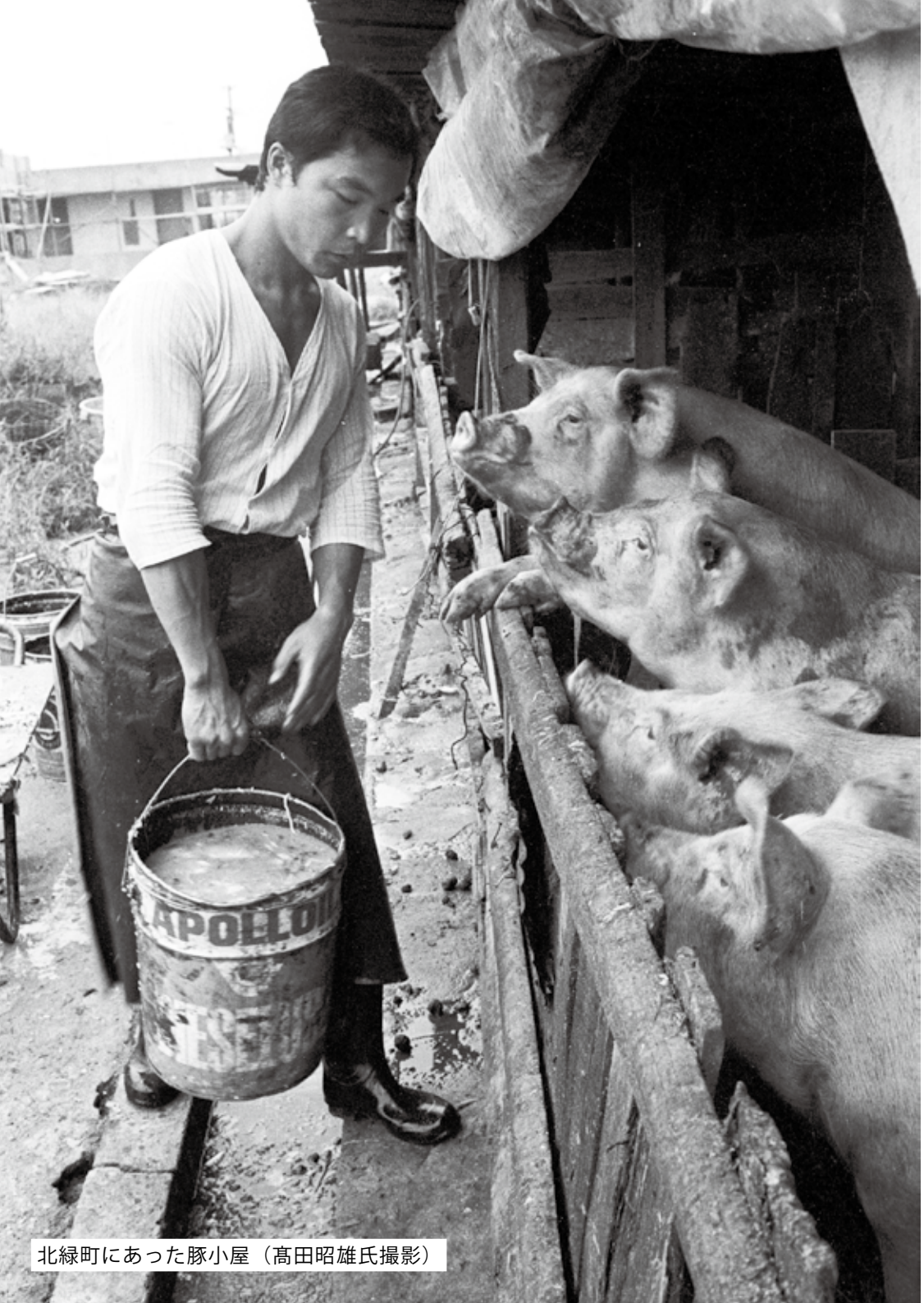
1960年代後半、朝鮮学校にて
民族楽器カヤグムを演奏する生徒たち（髙田昭雄氏撮影）

多文化共生をめざす水島

水島は戦争のためにつくられた「新しいまち」です。敗戦により、水島は軍都からコンビナートのまちへと変貌していきます。しかし敗戦を迎えても、在日コリアンへの差別はなくなりませんでした。日本政府は1952（昭和27）年、植民地時代に日本国籍であった朝鮮人を「外国人」と定めたため、公務員・公共的機関への就職や、公営住宅などを利用する道が閉ざされてしまいました。現在も選挙権はありません。

戦後、多くの在日コリアンが「ニコヨン」と呼ばれる日雇い労働に従事したり、生活保護を受けたりする状況に追い込まれました（前掲『在日朝鮮人』144～146頁）。そのような中で、養豚業や廃品回収などが残された選択肢でした。亀島山の周辺や北緑町で養豚業が行われていたことを記憶している人もいることでしょう。また、水島コンビナート建設のための重労働にも在日コリアンは従事します。

水島には医療生協という組織があります。戦後、水島に集まってきた人たちは、空襲で焼け出された人や、海外からの引揚者などの戦争犠牲者でした。朝鮮の人たちもここに含めてよいでしょう。こうした経済的に厳しい状況にある人たちは、きちんとした医療を受けることができず、不満が高まっていました。医療生協は、生活困窮者がお金を出し合って医療機関をつくるために1953（昭和28）年に設立された組織です。この医療生協をつくる活動を、朝



北緑町にあった豚小屋（髙田昭雄氏撮影）

コンビナート建設に在日コリアンの労働者も従事した（髙田昭雄氏撮影）

北緑町には屑鉄業者も多かった（髙田昭雄氏撮影）

鮮の人たちも一緒に行ってきました（『倉敷医療生協三十五年史』編集委員会編著『住民が医療を築いた――倉敷医療生協三十五年史』倉敷医療生活協同組合、1988年、34頁）。

また、水島はコンビナートからの大気汚染公害に悩まされた地域です。公害によって、喘息や慢性気管支炎などの呼吸器疾患が多発するようになりました。これらの病気にかかり、申請した人は公害病の患者として医療や生活保障的給付を受けることができる制度（公害健康被害補償法）が1970年代にできましたが、これには国籍の制限はなく、在日コリアンも利用することができました。また1983（昭和58）年には、公害被害者がコンビナート企業に対して訴訟を起こし、被害補償と大気汚染の改善を求めてきました。この原告の中にも在日コリアンが含まれています。

近年、「地域における多文化共生」という考え方が重視されるようになりました。これは「国籍や民族などの異なる人々が、互いの文化的ちがいを認め合い、対等な関係を築こうとしながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと」と定義されます（「多文化共生の推進に関する研究会報告書――地域における多文化共生に推進に向けて」総務省、2006年、5頁）。理念としては素晴らしいのですが、日本社会におけるマイノリティへの差別や無関心を放置したまま、これを唱えても意味がありません。この理念を実現するために、私たちが足もとの地域で具体的な取り組みに着手する必要があります。

朝鮮半島をルーツにする人たちが多いということは、水島の一つの特徴です。医療生協の例からも、以前から水島では、同じ空気を吸う仲間として多文化共生に取り組む芽があったといえるでしょう。今回、「みずしま地域カフェ」で朝鮮学校を訪問し、これまで「見えていなかったこと」に驚く場面が多くありました。まず互いに知ろうとするところから始めたいと願うひと時となりました。

亀島山地下工場は
朝鮮人労働者によって掘られた

裏表紙写真（上部）：1970（昭和45）年、新築された校舎の竣工式（髙田昭雄氏撮影）
裏表紙写真（下部）：2021年の岡山朝鮮初中級学校
文：林美帆（みずしま財団）　除本理史（大阪市立大学）
デザイン：山口百香（Myu dear,）
Special thanks：伊地知紀子　高元秀　髙田昭雄
2022年2月
発行：公益財団法人水島地域環境再生財団
地球環境基金の助成を受けて製作しました

みずしま財団
公益財団法人 水島地域環境再生財団

地域カフェについて

岡山県倉敷市の中にある水島地域は、日本有数の鉄鋼・石油のコンビナートを有している地域ですが、江戸時代の新田干拓によって作られた農村でもあり、瀬戸内海の豊かな海に養われた漁場を有していることから漁業の文化もある、日本近代の色んな歴史が詰まった魅力的な場所です。そんな水島地域の新しい魅力を探し出すのが「みずしま地域カフェ」です。「水島メモリーズ」はみずしま地域カフェで集めた情報をもとに構成しています。

水島地域の「ワクワク」をお伝えできればと考えています。

みずしま財団について

みずしま財団は、正式名称を「公益財団法人水島地域環境再生財団」といい、2000年3月に、水島地域の環境再生・まちづくりの拠点として設立されました。

住民を主体に、行政・企業など水島地域の様々な関係者と専門家が協働する拠点として、よりよい生活環境を創造する活動を展開していくために、調査活動をはじめ、学びの場づくり、人とのつながりづくり、そして公害の経験の継承と公害患者支援などを行っています。

DATA

岡山朝鮮初中級学校

〒712-8022 岡山県倉敷市水島北緑町 2-3

水島
メモリーズ